

新古今和歌集

一

新古今和歌集序



夫和歌者群德之祖百福之宗也。云夢天
成之際。人情義未著。素鶴地釋。二十一
字之錄。南興。尔来源流。宅無長短。注
異。或稱下情。而達。詞或宣上德。而化。此爲
遊宴而書。懷式。採教。而寄。言誠。是
理也。按。氏之鴻。淑。賞心。樂事。一之。是。鑑。者
也。是。以。解。代。明。時。集。而。錄。之。若。此。精。微。
何。以。漏。脫。然。猶。崑。嶺。之。玉。採。之。不。有。餘。鬱。其
之。枝。伐。之。不。盡。盡。物。既。如。此。弄。心。宜。然。仍。治。

春議右清門舊源朝臣道具大歲鄉藤原
朝臣有家九近清權中將藤原朝臣之家
系上源及藤原朝臣之家隆左近衛權中將
藤原朝臣雅經等不擇貴賤高下合
撰錦句玉章神明詞佛院之作爲表
希夷難而同隸始於曩昔這丁當時
波此德編若俾星進每至三國於音
朝探砌風涼之夕射輕波津之遺流等
淡香少之芳躅武吟武詠採序象之
牙角無黨上無偏指翡翠翠之羽毛裁成

西得二子有類聚而爲二十卷名曰新古今
和歌集其時令藤原物之爲屬心序而星
羅衆作雜錄一付並群品而雲布綜
得寸必收蓋云備矣伏惟來自代邸而
踐天子之位謝於漢宮而追洛陽之雅令
上階下之教親之雅之深帝道之昭
洵日試朝庭之本身也幸不貴我國
之習俗方今卷之章合新華夷詠仁風
化樂可春之日野草悉靡月宴每興
千秋津洲之廣推靜誠靡之爲有

載時可蹟深覺操統之志故撰斯一
集永欲傳百世故上古之南齊集集者蓋
乞和齊之源也編次之起因准儀皇
序惟邀煥赫秘授延喜有古今集定人
命論命而成天曆有後撰集之人
奉源言而成其後有拾遺後拾遺
至葉詞苑子載小集注出於聖主數代
之勅殊恨為撰者一才之取因茲功延
喜天曆二朝遺義定注訂出屢更革
之與百家批神妙之居展刊修之序

已新集之為詳也先抽可葉集中庚午
七代集之外深素而微長其遺廣求而
以善必舉但隆張網於山野微禽以逃
連雀於江湖小鮮偷滿誠當視雖之
不達之之有篇章之指遺今六通採
得且取勒終也抑於古今者不載當代
之御製自後撰之初如其時之天章
若考一部在滿十篇而今既入之自
已得二十有六義若相五二兩隆可定
無風骨之多和編以統道之思不後

情之眼凡願取捨者嘉尚之能持運神
襟伏羲表卷皇德而守十一年與試會
推觀聖造之書史神武開帝切而
八十一代當朝猶未融毅筆之撰集其
定知天下之都人士女通款斯道之過
逢矣不獨記仙洞無何之鄉有胡鳳嶠
月之興亦欲呈皇象元久之歲有溫
故知新之心終推之趣不在茲年于
時聖曆乙丑壬春二月云尔

Handwritten text in cursive script, likely a list or index of names and titles. The text is written vertically from right to left. Some legible words include "Lectures on the History of China" and "Lectures on the History of the East".

Handwritten text in cursive script, likely a list or index of names and titles. The text is written vertically from right to left. Some legible words include "Lectures on the History of China" and "Lectures on the History of the East".

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the right page of an open book. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the left page of an open book. The text is dense and fills most of the page.

新古今和歌集第一

春壽上

まろしゆらと見ゆる

信政を以て

かきつるはるのさかづき

しづかにしる

太上天皇

かきつるはるのさかづき

るるはるのさかづき

武子御

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

文部

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

夕月夜をひかりのしほに照らしぬる花の影

在原秀独

在原秀独

美ら島

あかり

いづれもなほ

あかり

あかりのあかり

あかり

あかりのあかり

あかり

あかりのあかり

あかり

あかり

あかりのあかり

あかり

あかり

あかりのあかり

あかり

あかり

あかりのあかり

あかり

あかり

あかりのあかり

あかり

あかり

あかりのあかり

にこそまじりていかにあはれなる
ものぞ春のさかすかに

Yunwaga

あつたはるのうらやまのさかすかに
花のさかすかにあはれなる
ものぞ春のさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

Yunwaga

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

Yunwaga

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

あつたはるのうらやまのさかすかに

Yunwaga

あつたはしりていふふたつとていふかたはあつたはしりて
梅の花はあつたはしりていふふたつとていふかたはあつたはしりて

源後光親

ふたつとていふふたつとていふふたつとていふふたつとていふ
はつたはしりていふふたつとていふふたつとていふふたつとていふ

徳宗女隆子下

梅の花はあつたはしりていふふたつとていふふたつとていふ
ふたつとていふふたつとていふふたつとていふふたつとていふ

美作守又平俊成女

梅の花はあつたはしりていふふたつとていふふたつとていふ

梅の花はあつたはしりていふふたつとていふふたつとていふ

ふたつとていふふたつとていふふたつとていふふたつとていふ

梅の花はあつたはしりていふふたつとていふふたつとていふ

ふたつとていふふたつとていふふたつとていふふたつとていふ
二月事重なるやうなふたつとていふふたつとていふふたつとていふ

康資貞生母

梅の花はあつたはしりていふふたつとていふふたつとていふ

梅の花はあつたはしりていふふたつとていふふたつとていふ

とらこ梅はらから梅の花はよこしにけりしは
とらこ梅はらから梅の花はよこしにけりしは

式子内親王

かろちしよふにこころはあはれ梅の花はよこしに
かろちしよふにこころはあはれ梅の花はよこしに
かろちしよふにこころはあはれ梅の花はよこしに
かろちしよふにこころはあはれ梅の花はよこしに

文集新編春次約不情不情職は月
文集新編春次約不情不情職は月

とらこ梅はらから梅の花はよこしに

とらこ梅はらから梅の花はよこしに
とらこ梅はらから梅の花はよこしに
とらこ梅はらから梅の花はよこしに
とらこ梅はらから梅の花はよこしに

百有年

源具親

百有年

櫻月抄
抄の末に下を言ふて今

疾凍法師

いふてあはれはまらぬ月夜あはれ
刑部を頼むて今一はらりて今

白鳥のあはれ

さくら花のあはれはまらぬ月夜あはれ
あはれ

あはれ

あはれはまらぬ月夜あはれ
あはれ

あはれ

あはれはまらぬ月夜あはれ
あはれ

あはれはまらぬ月夜あはれ
あはれ

あはれ

あはれはまらぬ月夜あはれ
あはれ

あはれ

あはれはまらぬ月夜あはれ
あはれ

信

此の書は、
百首、
信

信

信
信
信

信

信
信
信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

敬田院大佛

其由の事... 千二百... 年

有本庄

白... 有本庄

有本庄

... 有本庄

... 有本庄

... 有本庄

... 有本庄

... 有本庄

有本庄

... 有本庄

... 有本庄

こゝに書かれたものは、大抵、
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

海くらくとけりて人わはらうとあはれを

道令（一）一

ふかたの山田の山を移りすと死にたはれをいふ
百といふといふといふ一

藤原の家の名

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

題（一）の

藤原の家御の

昔山田の山を移りすと死にたはれをいふ

和歌行の多人の集積の死といふ

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

藤原の家の名

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

藤原の家の名

心よのまきつゝの心よのまきつゝの心よのまきつゝ

藤原の家の名

胡氏宗譜

新古今和歌集卷第二

春奇下

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

春上末の歌

桜はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

春上末の歌

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

春上末の歌

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

春上末の歌

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

春上末の歌

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

春上末の歌

物はわろくもあはくも年頃一ゆり
けり屏風まゝに桜は紅らむと

九河内杉垣

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

伊勢

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

貫久

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

寛平河内時きつゝあはれぬのさかみ

貫久

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

貫久

貫久

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

貫久

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

貫久

貫久

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

貫久

貫久

いづれかきつゝあはれぬのさかみ

貫久

皇太后后宮奉養成

人... 撰ら... 花... 部... 成...

... 部... 成... 皇太后后宮奉養成

皇太后后宮奉養成

... 部... 成... 皇太后后宮奉養成

... 部... 成... 皇太后后宮奉養成

皇太后后宮奉養成

... 部... 成... 皇太后后宮奉養成

... 部... 成... 皇太后后宮奉養成

皇太后后宮奉養成

... 部... 成... 皇太后后宮奉養成

皇太后后宮奉養成

ふらふらあつちのまふらふらあつちのまふらふらあつちのま
海内院津田河内守有らふらふらあつちのま

大御言師於

本邦の言の録のふらふらあつちのま
花中言の録のふらふらあつちのま

左京大夫兼侍

あつちのまふらふらあつちのま

也 活字書体

刑部卿兼右

あつちのまふらふらあつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのまふらふらあつちのま

越前

あつちのまふらふらあつちのま

あつちのま 中江朝上院

あつちのま 郷

あつちのまふらふらあつちのま

あつちのま

あつちのまふらふらあつちのま

あつちのま

二階院書記

ふらふら顔かへりしほらるゑん
るくきりしほらるゑん

二階院書記

ふらふら顔かへりしほらるゑん
るくきりしほらるゑん

刑部日記

ふらふら顔かへりしほらるゑん
るくきりしほらるゑん

二階院書記

と

二階院書記

ふらふら顔かへりしほらるゑん
るくきりしほらるゑん

二階院書記

ふらふら顔かへりしほらるゑん
るくきりしほらるゑん

二階院書記

二階院書記

二階院書記

二階院書記

ふらふら顔かへりしほらるゑん
るくきりしほらるゑん

と

二階院書記

ふらふら顔かへりしほらるゑん
るくきりしほらるゑん

夢のつらさをしるす惟明親王の御事
けしき

式子の御事

まじりての御事けしき
惟明親王

まじりての御事けしき
みまの御事けしき

在りての御事

まじりての御事けしき
まじりての御事

まじりての御事けしき
まじりての御事

後醍醐天皇

まじりての御事けしき
入道前実徳天皇の御事
まじりての御事

後醍醐天皇

まじりての御事けしき
まじりての御事

後醍醐天皇

まじりての御事けしき
まじりての御事

後醍醐天皇

まじりての御事けしき
まじりての御事

藤原雅任

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

歌をよみし

白鳥の院法

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

残春のうら

板取大政

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

心より

大徳言信

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

白首青甲に

式子内親王

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

小舟のうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

かゝるうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

清原之猶

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

曲水の宴よりある 中御言

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

紀貫之曲水宴よりある 何月八日 離

暗なるうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

坂上之助

花をよみしうらなもさきよきわたりてさきよきまのよみ

雲林院の傍よりある 何月八日

ていしんくわんじやくよよらたわきした

良蓮法師

ゆつら花をりつちんはらりゆくはるきまるとはく

千の心集り奉命

麻葉法師

あひちりあひちりあひちりあひちりあひちりあひちり

あひちりあひちりあひちりあひちりあひちりあひちり

持中納言

あひちりあひちりあひちりあひちりあひちりあひちり

あひちりあひちりあひちりあひちり

捕頭

あひちりあひちりあひちりあひちりあひちりあひちり

友原

あひちりあひちりあひちりあひちりあひちりあひちり

星美

あひちりあひちりあひちりあひちりあひちりあひちり

堀川院

持中納言

あひちりあひちりあひちりあひちりあひちりあひちり

あひちりあひちり

原見玉

ふりかへし 柿の葉のまじりて 秋の風を しのぎて 花の散るを 見送る

友原奥風

あつたよりの花の散るを 見送る 柿の葉のまじりて 秋の風を しのぎて

延喜河原

あつたよりの花の散るを 見送る 柿の葉のまじりて 秋の風を しのぎて
天曆四年二月廿六日藤つたよりの花
あつたよりの花の散るを 見送る

天曆四年

あつたよりの花の散るを 見送る 柿の葉のまじりて 秋の風を しのぎて

清慎の家屏風 母の心

あつたよりの花の散るを 見送る 柿の葉のまじりて 秋の風を しのぎて

あつたよりの花の散るを 見送る 柿の葉のまじりて 秋の風を しのぎて

藤原道信朝

あつたよりの花の散るを 見送る 柿の葉のまじりて 秋の風を しのぎて

波の心

大信の心

本社のいふこと今あらざりし一書に當るは作は
かき首なる一冊 疾速に師

くはりのまの漢の海に舟を載せしは治の舟
ふたに舟は書に舟なる

舟系修徳

ふたに舟は書に舟なる

舟系修徳

舟系修徳

舟系修徳

寛平は時后の書に舟なる

舟系修徳

舟系修徳

舟系修徳

舟系修徳

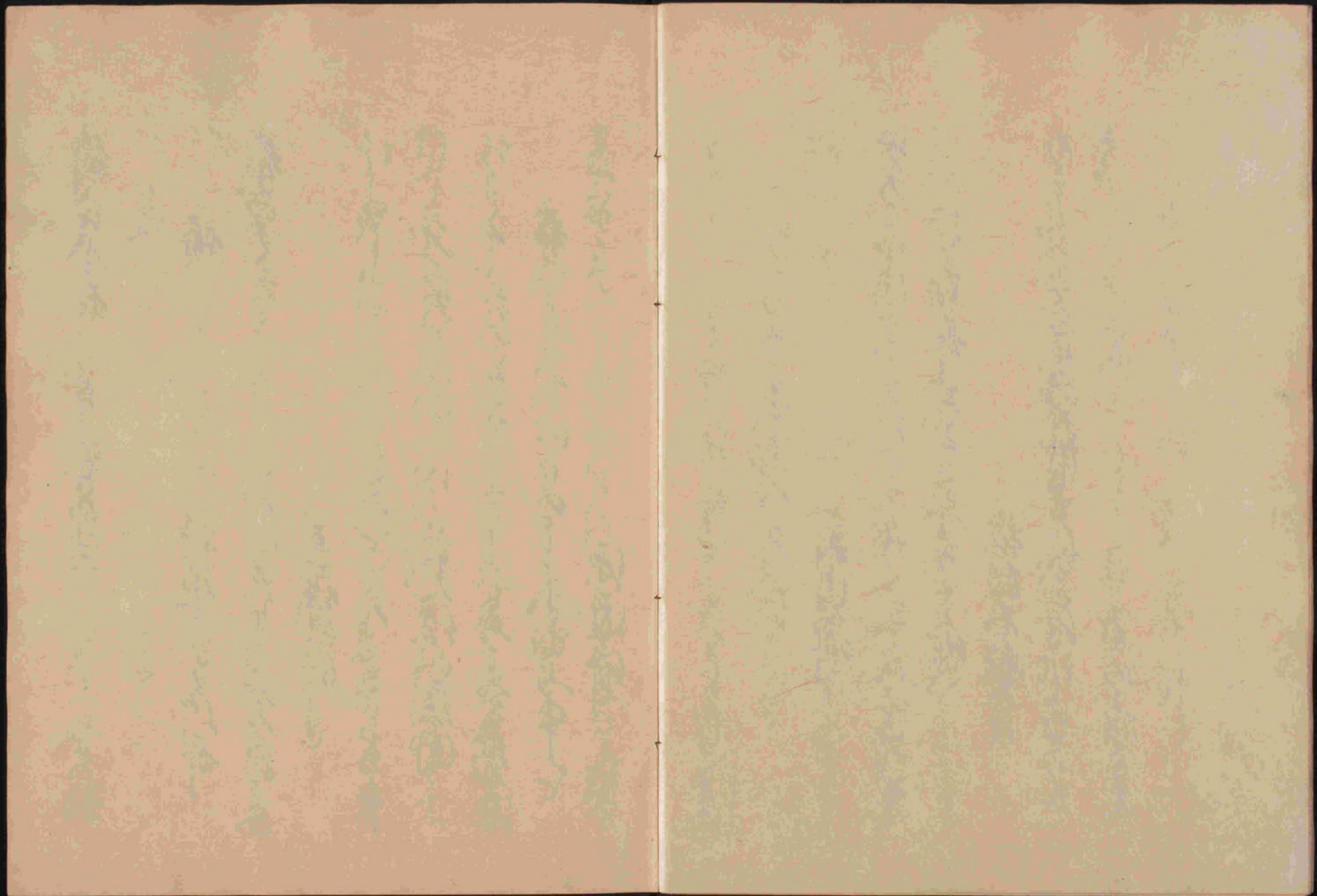
舟系修徳

舟系修徳

舟系修徳

舟系修徳

舟系修徳



新古今和歌集卷第三

夏哥

題名

持鹿天皇御歌

春のさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

源道衡

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

源道衡

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

皇太后御歌

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

源道衡

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

源道衡

あけのさかきとてはなはたのさかきとてはなはたのさかきとて

都らぬ

大正天皇御即位

卯花のほろけの心はあめいりてのちかき
あはれ

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれ

藤原経隆

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

行實の院女院云

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれいそひま

書好好患

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

藤原経隆

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

近江守

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれいそひまのちかきあめいりてのちかき

あはれいそひま

書好好患

何れが此の如くはるる事なればとて

并乳母

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

中絶する事

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

稀有人磨

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

大絶言性信

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

待者前代をよめること

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

乳母

花園に在り

乳母の事なるはるる事なればとて
乳母の事なるはるる事なればとて

お中細言這尾局

卯辰のうらなう海を時を月をうらなう
入道前園はるまはるまのうらなう
ゆとゆと何新なる 皇太子のうらなう
青のうらなうのうらなうのうらなう
雨のうらなうのうらなうのうらなう

目不知

相摸

きんぎょのうらなうのうらなうのうらなう
海を時を月をうらなう

海を時を月をうらなう

寛治八年 帝を政を月をうらなう

海を時を月をうらなう

梅家行のうらなう

海を時を月をうらなう

海を時を月をうらなう

梅家行のうらなう

海を時を月をうらなう

海を時を月をうらなう

海を時を月をうらなう

海を時を月をうらなう

海を時を月をうらなう

一 山崎の事
山崎の事
捕政を以て

山崎の事
山崎の事
後徳を以て

山崎の事

山崎の事
山崎の事
時勢を以て

山崎の事

山崎の事
山崎の事

山崎の事

山崎の事
山崎の事

山崎の事

山崎の事
山崎の事

山崎の事

山崎の事
山崎の事

山崎の事

山崎の事
山崎の事

山崎の事

何れも此の如くはなれども

此の如く

此の如く

此の如くはなれども此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如くはなれども此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如く

此の如く

此の如くはなれども此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如くはなれども此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如く

此の如くはなれども此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如くはなれども

此の如くはなれども

しるしをかくるにせむるは

か月のあつと 有東のあつと

むかひのあつとむかひのあつとむかひのあつと

高野のあつと

か月のあつとむかひのあつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

あつとむかひのあつとむかひのあつと

あつとむかひのあつと

式部内親王

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに
あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに
あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに
あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに
あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに
あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに
あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

あつたてのしるしに今もあつたてのしるしに

北条

白河院沖舟

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

忠実御書

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

此の

北条信直御書

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

北条信直御書

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

北条信直御書

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

北条信直御書

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

北条信直御書

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

此の御書は白河院に在りて御書に候と申す候に候

ふらふらと風をたぐりてゆく
うき世の夢をみる

春の風をたぐりて

こころをたぐりてゆく

うき世の夢をみる

春の風をたぐりて

こころをたぐりてゆく

うき世の夢をみる

こころをたぐりてゆく

うき世の夢をみる

春の風をたぐりて

春の風をたぐりて

こころをたぐりてゆく

うき世の夢をみる

こころをたぐりてゆく

こころをたぐりてゆく

うき世の夢をみる

春の風をたぐりて

こころをたぐりてゆく

うき世の夢をみる

病にうらなひおこすはるる世にひらひらとあはれ
雲は隔遠はるるにうらなひおこすはるる

源信光の歌下

けりけりなをまけしはるる世にひらひらとあはれ

夏月とあはれ

信に信相成

たのふまにひらひらとあはれはるる世にひらひらとあはれ

白首とあはれ

成子の歌下

たまのまにひらひらとあはれはるる世にひらひらとあはれ

ふのまにひらひらとあはれ

おちの歌下

とつひにひらひらとあはれはるる世にひらひらとあはれ

白首とあはれ

信成の歌下

なほのまにひらひらとあはれはるる世にひらひらとあはれ

二海院の歌下

たのふまにひらひらとあはれはるる世にひらひらとあはれ

ふのまにひらひらとあはれ

信成の歌下

たのふまにひらひらとあはれはるる世にひらひらとあはれ

ふのまにひらひらとあはれ

たのふまにひらひらとあはれはるる世にひらひらとあはれ

ふのまにひらひらとあはれ

かきり

後巻は神

秋はるるさきさきよしのつゆもあめと秋の神を
明作素直な懐こころと

こころは神

うさぎのむすてゆつるまのしらにえさきよふ座敷を
夕つゆとよるる おをぬか

ちいさのちいさけいさきさきしゆあめくせりか歌
白くさきさきさきさきさきさき

かきり

さうらのつゆのむすてゆつるまのしらにえさきよふ座敷を

夏うららとてははかきり

大徳寺の歌

雲はくさきさきとあさき風かきりあめあめよふ
太神あめあめとあさき風かきりあめあめよふ

大上天皇

かきりあめあめとあさき風かきりあめあめよふ
文治六年廿御入内屏風

入道宗関白の歌

かきりあめあめとあさき風かきりあめあめよふ
千六百百あめあめよふ 文治御

しほふにたゞのり物にさしつかへせり

百有六の事 其の百六十六也

ふまへていふにたゞのり物にさしつかへせり

道にたゞのり物にさしつかへせり

今もたゞのり物に

たゞのり物にさしつかへせり

一

たゞのり物にさしつかへせり

新古今和歌集卷第十

秋喬上

秋

中納言

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり
百首多し

崇徳院

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

藤原家隆

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

又治平二年

後醍醐天皇

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

藤原家隆

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

藤原家隆

秋の心は秋の葉の如くして秋の枝に秋の鳥あり

年有... 自... 也...

有京... 海... 舟...

わ... び... び... び...

千... 百... 番... 号...

信... 政... 公... 臣...

伊... 勢... 家... 名... 氏...

右... 傳... 名... 道... 氏...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

源... 貞... 親...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

頭... 昭... 仲...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

新... 井...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

有... 京... 海... 舟...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

あ... ね... の... の... け... の... 湯... ね... 湯... ね... 湯...

出雲津虎中百首之書なる可

皇天后之今又後成

今一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて
中酒言中將の家をわたりて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて
一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて
一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて
一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて
一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて一物ありて

ろくろくすかし 式子内親王

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

おららる 相模

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

不貳三位

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

美濃守

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

小野小町

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

三長所時及久岸氏

紀伊

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

歌一とて 不貳位

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

宇治守國はるあはれはむらりなるかむあはれはむらり

よとあはれ 行人御言長女

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

いひあひあはれはむらりなるかむあはれはむらり

藤原長法

若山満子也

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

中物言に御捕家屏凡一

此書らし

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

中物言に御捕家屏凡一

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~



秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ  
中絶言の家持

秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ  
九河内行植

秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ  
千八百番歌人

秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ  
左中持の早

秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ  
蘭とよめる  
公歎法師

崇徳院の御有言の早とよめる

藤原清隆の早

秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ  
入道とよめる  
何とよめる

白美入道とよめる

秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ  
源朝臣とよめる

大進とよめる

秋の夕方の野人の声はわらわらとせよ

おきりし

清浄好集

かたはるくしんあししんはく指さるる落るる若くは

貫之

ふてのいんかきさる紙のいんはらちあてあつた

飯上光則

うらうらあさるあめりあひなむゆいふか

人丸

ひあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

いんかき

小舎いんあしあしあしあしあしあしあしあしあし

清浄好集

かたはるくしんあししんはく指さるる落るる若くは

おきりし

かたはるくしんあししんはく指さるる落るる若くは

おきりし

清浄好集

かたはるくしんあししんはく指さるる落るる若くは

おきりし

清浄好集

かたはるくしんあししんはく指さるる落るる若くは

~~~~~

あゝ人の世の無常

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

歌の心

疾速法師

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

日くしつていふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部

和泉式部をいふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

菅原好忠

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

相模

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉

和泉式部

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉

和泉式部

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

藤原家隆の下

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部といふはあつたてのいふはあつたてのいふはあつたて

和泉式部



しむる又道重の御下

周少子と云らる御のしむるはかねわかれ日か

後三位頼政

と承ふともかくとて承りしそふははるかに思ひ

はむらたれあはるるはあはれみし月の光を

そそ給ふあはれし 大業二年正月

月しむるはあはれみし月の光を

わらわの事今も御色月をいふと

大業三年正月

あはれみし月の光をいふはあはれみし月の光

あはれみし月の光をいふはあはれみし月の光

大業三年正月

あはれみし月の光をいふはあはれみし月の光

あはれみし

大業三年正月

あはれみし月の光をいふはあはれみし月の光

大業三年正月

あはれみし月の光をいふはあはれみし月の光

あはれみし月の光をいふはあはれみし月の光

大業三年正月

あはれみし月の光をいふはあはれみし月の光

建永元年二月亥午家杜月子  
しんてい

しんてい  
しんてい  
しんてい

しんてい  
月系松風  
系連法師

しんてい  
月系松風  
鴨長門

しんてい  
しんてい  
右系松風

しんてい  
しんてい  
右系松風

しんてい  
道和院丹後

しんてい  
鴨長門

しんてい



鄭少公

上東院小女言

そこのおぼろげな月影のうらみは

わがまをうらみし海もなほ月影

暁草の露の如く

あはれなる月影のうらみは

暁草の露

ふたはらの露

あはれなる月影のうらみは

大いなる

あはれなる月影のうらみは

暁草の露

あはれなる月影のうらみは

上東院小女

あはれなる月影のうらみは

暁草の露

あはれなる月影のうらみは

あはれなる月影

暁草の露

あはれなる月影のうらみは

あ

暁草

あはれなる月影のうらみは

永善堂の御書

大徳堂御書

以教の御書  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

崇徳院の御書

大徳堂御書

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

道因の御書

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

慶徳院御書

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

藤原公家御座

乙卯年八月十日

秋分

秋分はとうとうの秋分なりけり

秋分

秋分

秋分はとうとうの秋分なりけり

秋分

秋分はとうとうの秋分なりけり

秋分

秋分はとうとうの秋分なりけり

秋分

秋分はとうとうの秋分なりけり

秋分

秋分

秋分はとうとうの秋分なりけり

秋分

秋分

秋分はとうとうの秋分なりけり

秋分

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす
大中之定頼 推

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす
大中之定頼 推

大中之定頼 推

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす
大中之定頼 推

大中之定頼 推

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

大中之定頼 推

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

あつた風は向をくし居る月を海に映さる
影さす

大中之定頼 推

新古今和歌集卷第十五

新古今和歌集卷第十五

秋歌下

わがふとわがふとわがふとわがふとわがふと

わがふとわがふとわがふとわがふとわがふと

わがふとわがふとわがふとわがふとわがふと

わがふとわがふとわがふとわがふとわがふと

わがふとわがふとわがふとわがふとわがふと

常陸守

わがふとわがふとわがふとわがふとわがふと

わがふとわがふとわがふとわがふとわがふと

わが家には京の麻と鎌倉の麻とある

京中御言目録

妻の麻のしるしはあはれいふにたれか
百のしるしをうけし時解のしるし

修の親と

白鳥の羽もいと清く流るる麻のしるし
晩御麻のしるし

ふはりの食

御うぬすむ麻のしるし
るる麻のしるし

捕殺の麻目録

〜の麻のしるし
〜の麻のしるし
〜の麻のしるし
〜の麻のしるし

揚中御言目録

〜の麻のしるし
〜の麻のしるし

〜の麻のしるし

西行法師

山崎の居る所を尋ねて見ると
白河の境より北に三町ばかり
ありて山崎の所なり

申すは又師は

山崎の所より北に三町ばかり
ありて山崎の所なり

藤原の所なり

山崎の所より北に三町ばかり
ありて山崎の所なり

山崎の所より北に三町ばかり
ありて山崎の所なり

山崎の所より北に三町ばかり
ありて山崎の所なり

藤原の所なり

山崎の所より北に三町ばかり
ありて山崎の所なり

藤原の所なり

山崎の所より北に三町ばかり
ありて山崎の所なり

吾侯の御印

Belongs to the ...

申御言葉持

今一上様...

人磨

梅...

...

申

...

菅原の御下

...

申御言葉持

...

...

...

人磨

...

天磨

...

...

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年五月二十日

大正十一年

大正十一年五月二十日

あしき

横をよめるもあはれきりていふはたふらふらふら
白きくちのむかひのむかひのむかひのむかひ
くちのむかひのむかひのむかひのむかひ
くちのむかひのむかひのむかひのむかひ

あしき
あしき

あしき
あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

備中物言三行

今よりいふ所は我は昔もあつたといふ事なれども風のある
こゝろは昔もあつたといふ事なれども

中務の身は平朝臣

あつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

海をいふ所は昔もあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

海をいふ所は昔もあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

人はいふ所は昔もあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

いふ事なれども

いふ事なれども

いふ事なれどもあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

いふ事なれどもあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

いふ事なれどもあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

いふ事なれども

いふ事なれども

いふ事なれどもあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

いふ事なれども

いふ事なれども

いふ事なれどもあつたといふ事なれどもあつたといふ事なれども
いふ事なれども

子入百部を奉

春を待たずと絶

神を祀る者月夜ありては心も静かきとて思ふべし

おろそかにせし音もつらうとて所無の事

あはれ御心懸念

海にゆくは海に渡るは心も静かきとて思ふべし

言はれぬ

長月を待つは心も静かきとて思ふべし

後を待つは心も静かきとて思ふべし

海を渡る

春を待たず

心も静かきとて思ふべし

~~~~~

中務の自吉子親也

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

新編のりつゝと申すは其の意は、  
今通に申すは、  
何れも、  
大甲、  
大甲、

右京御中御下

心、  
心、  
心、  
心、  
心、

之山郷

心、  
心、  
心、  
心、  
心、

右京御中御下

心、  
心、  
心、  
心、  
心、



石上花散りて風をよそふ花の  
心もなき花の心もなき

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

心もなき花

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

心もなき花

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

心もなき花

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

心もなき花

花の心もなき花の心もなき

權中御言長方

あつしに御言長方は御言長方の御言長方  
長月には御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方

權中御言長方

あつしに御言長方は御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方

權中御言長方

あつしに御言長方は御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方

權中御言長方

あつしに御言長方は御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方

權中御言長方

あつしに御言長方は御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方

權中御言長方

あつしに御言長方は御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方

あつしに御言長方は御言長方の御言長方  
御言長方の御言長方の御言長方

うきうきうきうきうきうき


平賀正親

はらけはらけはらけはらけはらけはらけはらけはらけ  
関の月書

平賀正親

はらけはらけはらけはらけはらけはらけはらけはらけ





|      |
|------|
| 132X |
| 104  |
| 16   |